理シテ其頃ハマダ東大ニ居ラレタ今ノ京大ノ小泉源一博士ニ回送シテ檢定ヲ願ッタガソノ結果トシテ多クノ新種ガ發見サレ前記ノ如キ記念名ヲ有スル植物モ出來タ譯デアル、西村君ハ小笠原ノ生活ヲ樂ミ一生ヲ同島ニ過シタイコトヲ常ニ希望シテ居タガ孤島ノ哲人モ浮世ノ波風ニハ如何トモシ難ク、近年千葉縣柏町ノ嗣子ノ許ニ歸住シテ優遊自適シテ居ル

○我邦最古且ツ創刻ノ園藝書『花壇綱目』（承前）

不崩岡　吉（ヨシ）壽（ヒサ）

花壇綱目ノ刊行サレタルハ延寶九年卽チ天和元年ナルモ早クヨリ寫本トシテ世ニ流布セラレタルガ如シ、今次ニ予ガ知ルトコロノ傳本ヲ左ニ記ス

○花壇綱目　甲本　一帖

寬文四年ノ序　（寬文四年ヨリ延寶九年ニ至ル十七年）

製本　胡蝶裝　竪五寸八分　横五寸二分

用紙　間ニ合紙　兩面書

匡郭　無シ

行數　八行

寬文四甲辰仲秋ノ序文平假名交　六張　目錄一張

序文ハ版本及ビ他ノ寫本ト對比スルニ文意ハ同一ナルモ字句行文ヲ異ニセル點多ク他ノ寫本ノ流布本ハ版本ト同文ナリトス、今寬文四年本ノ序文幷ニ綱目一部ヲ揭グ

花壇綱目序　（變體假名ハ凡テ普通假名ニス）

故人云ル事有陰者の三の友と云は一に書二に茶三に花となん然に書はこま唐迄のふるき新敷こととも見かしこきひとの心はへをさぐり得るのたよりにもよろしくまことにこゝろの友なるへし茶は胸臆を冷しめ鬱眠をさまし其風流にして園香最性心を養つへし殊に友とち相かたらふ次てにも是をもてあそひし古來多シ花は春秋のかさしとなり或は山野にかりおもとめ或は村里庭前なとに移し置て閑暇の友となせり此三の内何れをくれたちとすへし共分かたしされは諸のはなの中にも梅を愛し人もありおほくは櫻にしつこゝろなく聞へあるひは牡丹をゑひまたはいんいつの景氣を興して菊に心をよせあるひは蓮を愛して花の君子なと賞しも侍そかし又世の中にあらゆるなくさみこといつれも好む所にしたかひていさきよく思ひなし氣をたすけやしなふわさとみへたりされは一向に何をとりいつれを捨へきとはなけれとも好色厚味の閑は事にかひ多し又居家をたくみにし金銀をちりはめ身に美服をかさり清香を薰すへきも其費なきにあらす絲竹金鼓音曲等もつれつれをなくさめ閑居のこゝろをもすましつへけれとも今更ならふにかたし若日夜事とせはかしましく隣家の耳をも驚かしめつへし風雅は其情をあらはす縦は草木の柯葉のことし其柯葉を秀逸ならしめんとならは先其心を新にせよと先達の教にも侍るとなんさはあれとも敷嶋の道はるかに日たけぬれは是を翫ふへきほとの便もとめつへしともおほへすい碁程の勝負のあそひは仙術の一にしてよはひのか（た）ふく事をしらすとなれと人に勝つことをもとめんとするもいとむつかし書を友とせんもこのましくは思ひなから不才不根なれは及かたし□は本より我等得さる事なり茶湯は紹翁利休より中興し本意とする所は我に恥る處穢るゝ事なき清淨の意と聞及ぬれと今は其道も末に成侍る也名物高直の道具をのみ見所とし金銀の費多を興として下民のつかれをいとはす只奢を極にひとしきやうなり却て金銀をおもしとするゆへにやされとも茶を愛する志ふかくは古茶の湯の道をもたつぬへけれとも自性是にうとく名園の茶たにも其風味こまやかなる所を味しらすやゝもすれは煎茶こそまされなと思へりはなを愛する事同しなから木の花は所せはけなる庭に叶かたく移し植るも人力

ことむつかし結局痛かれなんことなと氣につかへぬれはたゝ野山□宿の快に咲ぬるを愛してやみなん草花こそ閑暇の友にこよなふ覺ゆれつれ〳〵の折節前栽の邊に是をあひし二葉もへ出る頃より折にふれ時につけて興しなくさむ事誠にしつかにして人に勞をもかけす尋來るひとの慰にもおのつからかなふ事多しいとまなき頃はいかほと打やり置ても非性なれはくるしむこともなくうへともしき程もあらす朝夕の出納もいらすたゝ閑暇にしたかひつれ〳〵の折節をなくさむる第一也かほとの寶なから守衞のいとなみも用るにたらす求るに隨ひあるにまかせおのか色々咲出たるなへてのはなを愛しいつもやすからん事をおもはゝ秋の月のさやかなるもかつらの花の盛なりと興し雪のあしたは木ことに花そと詠鶯の一聲も梅のかほりにたかへぬ人のこゝろふかき色香をもうつせは移す花のまかきによのうきぬしもわするゝわさなるへし其上養生の事を書る文にも青葉は肝□のたすけとなりて目を明らかにし白花は氣を育し赤花は心を養とそ本よりひとはこゝろ正しけれは常にやすし是をもとむるを志を立といゝそれ〳〵の家職をつとめ藝にあそふを法とするとやらん聞へしかと下愚の身のくせとして能事にはとかくおこたる事安ししかのみならすいとまあれはいたつらに怠を生し萬にくるしむ事多しされはせめて此草花をあいし心わろき怠兼の出來る障をまきらかししはしもやすからんにはしかしと思ひよりぬ大伴のくろぬしか歌のすかたを薪を負る山かつの花のかけにやすらへるとやらん貫之か評せしたくひおかしくとりなして獨笑をぬくみぬされともよき事かましく花實の植取を事とするものからきわめて不根なれはそれらの時節をたとり侍るゆへ栽花の品々を四季に分て書集花壇綱目とあた名付る若又こと人のためにもならは猶幸也よしなき長物語是や無用の古實なるへきゆるさしめ

寛文四甲辰仲秋

○

花壇綱目々錄

一　春草之部付花咲時幷花之色及分取節
二　夏草之部　右同斷
三　秋草之部　右同斷
四　冬草之部　右同斷
五　雜草之部　右同斷
六　牡丹品々部
七　菊品々部
八　養品々部
九　土品々部
十　牡丹植樣之部
十一　蘭植樣之部

○

花壇綱目第一

春　草

正月初ヨリ咲
一　ふくづく草　　花黃色　朔日草共元日草共云春秋分テ植る
二月頃
一　すみれ　　紫但濃薄二色有之春秋分テ植る
同

一　たんぽゝ　　黃白　分ル時分構なし
同　　るり色　春るりとも春秋分植ル
一　りんとう
同
一　黃梅　　黃草ニあらされ共其たけ少キ故に載之秋分植ル但取木さし木共ニよし

右一頁以下略ス

本書ハ本文十張ニシテ第七菊品々ノ終リヨリ以下缺張トナレリ惜ムベシ猶本書ノ傳來ハ不明ナルモ、明治二十年頃名古屋ノ人ヨリ得タルモノ前所藏者ノ藏印等ナク表紙ハ稍後チノ物ナランカ「花壇綱目全」トアリ

○花壇綱目　乙本　矢野宗幹氏藏　一冊

美濃紙本　行數六行（大字本）
紙數　三十一張
目錄一張　綱目ヲ十部ニ分チ第九ノ次ニ「名聞花不見草」一項アリテソノ終リニ「花壇綱目第十終」延寶九年酉六月日書寫之

トアリ、目錄ノ第十牡丹植樣ノ分ヲ缺ク、猶其次ニ植木ノ十二ヶ月ノ行事六張アリ、卷初序文無ク識語モナシ、內題ノ初ニ「花書」トアリ是ハ書名ヲ逸シタル爲メ假ニ標記セシナラント思フ、本書ハ延寶九年ノ書寫トアレバ前揭本ノ刊行サレタル年月ナリ、版本ニハ延寶九年酉孟夏トアレバ五月ノ事ナルベシ、今其內容ニ至ッテハ寬文四年本ト殆ンド同一面影アリテ延寶九年ノ書寫トアルモ其原本ハ通行ノ版本ニ非ザル事ハ明ラカナリ、本書ニ「松岡藩藏書印」、「中山藏書」ノ印アリ

○花壇綱目　丙本　牧野富太郎氏藏　一冊

寛文五年ノ序　三張半
美濃紙本　二十四張
行數　十行
本書ハ草木珍花異名ニ於テ刊本ト相違セル點ハ
牡丹　二十二品
芍藥　(無シ)
菊　三十二品
椿　(無シ)
梅　三十八品
桃　(無シ)
櫻　二十六品
躑躅　百三十四品

○花壇綱目　丁本　一冊

寛文五年ノ序　三張
半紙本　六十六張
行數　十行
十四項　二十三張半
外ニ正月ヨリ九月ニ至ル草花ノ分類名
梅　椿　芍藥　さつき　茨　木類　秋菊　山茶花等ノ名寄アリ

○我邦最古且ツ創刻ノ園藝書『花壇綱目』(承前)

本書ハ初メノ十四項ハ他ノ花壇綱目ト殆ンド同一ナルモ以下四十二張ハ他本ニ有ラサルモノナリ名寄ノ内ニ椿ノ如キハ五百種許ノ花形付アリ、其他芍藥、つゝじ、さつき等多數アリ、寛文五年ノ序アルモソレヨリ後チノ追加ナルベシ、其年代ハ知ル能ハザルモ、亦參考トモナルベキナラン、本書原本ハ故芋繁（イモシゲ）奥村氏ノ舊藏ナリシモ大正十二年九月二日、震災ニヨリ燒失セリ惜ムベシ［牧野曰フ、奥村氏ハ奥村繁次郎氏デ同家ハ燒キ薯屋ヲ營ンデ居タ事ガアッタノデ世間カラ芋繁ト通稱セラレ書籍、料理等ニ精シキ奇人デアッタ］

今次ニ諸本ノ異ナリタル點ヲ對照スベシ

○内題

甲本
乙本　花壇綱目

丙本
丁本　花段綱目
刊本

○序文

甲本　寛文四甲辰仲秋

乙本　無シ

丙本　丁本　（同文次ノ如シ）

序之終

于時寛文五曆乙巳花老月依求人之加和序猥書焉矣　　無名氏

（丙本）別本「序之終」ノ三字ナク

時にゆたかなるふみといふとしの名のきのとのみのほしのやとり花老の月に筆を染侍る

○目錄
甲本　十一綱
乙本　十綱
丙本　丁本　無シ

×　×　×　×

此花壇綱目ハ寛文ノ初メ頃ニ著作サレタルコトハ寛文四年本ノ序文ニヨリテ知ラルヽモ其著者ノ名ヲ逸セリ、ソレヨリ十八九年後、天和元年ニ上木サレタルモ其間寫本トシテ好事家ニ流布セルガ如シ、而シテ何レモ其作者名ヲ逸セリ、今刊本ニ依レバ著者ハ水野元勝トイヘル人ニシテ其遺稿ヲ松井賴母ナル人ノ手ニテ補訂刊行サレタルニハ非ザルカ、此松井賴母ハ松平(松井)周防守ノ支族ニシテ園藝ヲ好ミシ人ナリトイフ　(昭和七年三月七日再稿)

○ちゃんちんハ日本ノ樹ナラズ

牧野富太郎

ちゃんちんハ又きゃんちんト云フ卽チ椿(チン)デアル、支那ノ原産デ固ヨリ我日本ニハ野生ハナイ、今日邦內諸處ニ植エラレテアル者ハ原ト支那カラ來タ株ガ擴ガッタノデアル、昔支那(唐山)カラ種ヲ取リ寄セ山城宇治ノ黃蘗山卽チ萬福寺ニ栽エタトノ事デアルガ蓋シ是レガ該樹ノ本邦ニ入ッタ始メデアラウ、我邦ノ先輩此樹ガ固カラ我邦ニ在ッタヤウニ記シテヰルノハ誤リデアル、卽チ小野蘭山ハ其著『本草綱目啓蒙』卷ノ三十一ニ「椿ハ本邦ニ舊ヨリ多キ者ナレドモ昔人識ズシテ唐山ヨリ種(おほし)ヲ取ヨセ黃蘗山ニ栽シト云」ト記シ、小原桃洞之レニ雷同シテ其著『桃洞遺筆』卷ノ三ニ亦「本邦もとより多きものなれども、昔人識ずして、唐山(から)より種(たね)を取(とり)よせ、黃